

あおぞら（上），そよかぜ（下）

編集の基本方針と特色

21 世紀の子どもたちに人間愛を育む「せいかつ」

1 編集の基本方針

この教科書は、生活科設置の趣旨及びねらい、学習指導要領の目標及び内容に基づき、多数の学校の長年にわたる研究や実践を踏まえ、内容を精選・吟味して構成しました。

(1) 「人間愛」を育むことを理念とした編集

① 全編を貫く指導理念を「人間愛」の育成におきました。

「尊ぶ」「思いやる」という人間的な「愛」を根底に、各単元で「命」をともにし、慈しみの内に生きる子どもの姿を示しました。

② 家族との伝え合い、支え合いの場면을大事に考えて編集しました。

生活科の学習は、学校生活だけにとどまらず家庭においてもその営みは波及して、家庭生活の中に学習成果が発揮されたり、家族が子どもの発見や気づきを共有し合ったり、子どもの育ちを認め合ったりする姿となって現れてきます。そこで、家庭での営みや家族とのかかわりの場면을大事に考え、「家庭の場面からはじまり、家庭の場面で終わる」構成にしました。

また、地域の人々とかかわる学習も、家族学習と同様に考え構成してあります。

③ 身近な幼児や高齢者、障害のある人、外国籍の人などとの交流を通して、自分のあり様に気付いていく子どもの姿を示しました。

身近な幼児や高齢者、障害のある人、外国籍の人などとの交流を通して、単に人とかかわり方や接し方を身につけるだけでなく、相手の立場に立って自分のあり様に気付かされたり、相手から生き方や考え方、知恵などを学んだりして、共生社会の大切さに気付いていく姿を示しました。

(2) 地域に根ざした教材と直接体験を重視した単元の構成

① 地域の豊かな自然や日常的な生活事象を教材にして、単元を構成しました。

地域に生まれ、地域に育つ子どもたちが、地域での生活を通して学ぶ場を大事に、そのなかでその子らしい確かさで、豊かな学びと育ちを願って編集しました。

② いつもの遊び場や生き物の居場所、さんぽみちなど、四季を通して繰り返し足を運び、直接体

験を通して動植物や人とかかわり、ふるさとへの愛着が深められるよう編集しました。

積極的にものやこととかかわり、自分と人々、社会及び自然との緊密な関係を成立させ、気付きや発見する目、驚き・感じる心、事態に応じられる体、観察し追究し続ける意欲、表現する力など、「心や体を通して感じてわかり、知恵を獲得していく子ども」の姿を随所に示しました。

2 編集上特に留意した点と特色

(1) 豊かな生活のドラマをつくり出す単元の展開

① 単元展開をリードする主人公として「さと子・まこと」を登場させ、2人の様々な生活を描くことにより、物語性をもたせました。

子どもたちが登場人物と同じ心情や立場になって考え、活動することにより、主体的に生きる姿勢が培えることを願って編集しました。

② 専心とその連続、そこから生まれてくる感動、豊かな生活のドラマを描くことにより、体験にいざなう単元を設定しました。

子どもと対象とのかかわりは、かかわりを重ねれば重ねるほど、自分との関係に質的な高まりが見られます。また、対象におもいをかけ、おもいを込めていくほど、おもいがけなさ(感動)と出会い、相手へのおもいを一層深め、広げ、時に改めていく自分になっていきます。このような専心とその連続、そこから生まれる感動を大事に考え、このことを具現する単元として、例えば、上巻で「いきものといっしょ」「みのりのあき」、下巻に「いっぱいみのって」を設定しました。いずれも「自然」とかかわり、とりわけ「命」あるものとの営みです。そうしたかかわりのなかで、相手のあり様から自分のあり様を新たにしていく場面を大切に考え、一人一人が様々な「命」のドラマを体験できるように配慮しました。

そのほか、年間を通して繰り返し野外に出て自然とかかわる活動(上巻「はるがいっぱい」「まぶしいなつ」「あきがいっぱい」「ふゆもげんき」、下巻「二年生の春」)、夢の実現に向けて協力して創り上げる活動(下巻「れんげえんそく」「すすめすいすい号」)、追究して練り上げ実践する活動(五節句や地域の伝統文化・伝承遊び)等々、この期の子どもたちが活動のよこびや感動を味わいながら、自己実現できるように単元を配しました。いずれも多数の学校における長年の実践に裏付けられた、普遍性のあるものです。

③ 子どもを触発する端緒から収束まで、展開の工夫に努めました。

学習活動は子どもの願いから立ち上がるようにし、自ら課題をもって「調べ・考え・行いさらに追究し・表現する」展開とその収束を大事に示してあります。そうした学びのなかで、問題解決的な能力や態度を育て、意欲的な姿勢が培われるように配慮しました。

(2) 生活科ならではの学習の視点を明確にした内容の構成

① 生活科のはじまりが学校生活のはじまりと考え、合科・関連的な学習展開や学級づくりの姿を

示しました。(上巻「みんなともだち」など)

- ② 家庭生活を考える場面においては、自分ができる仕事や役割分担を見つけて実践することだけにとどまらず、より楽しい潤いのある家庭を築く活動のあり方や家族相互の精神的な支え合いなどを学習の大事な視点として示しました。(下巻「わたしとかぞく」など)
- ③ 自分自身や自分たちの生活・成長について考える場面においては、技能や身体的な成長など具体的に捉えることができる育ちとともに、対象とのかかわり方、接し方など精神的な育ちも捉えられるようにしました。(下巻「大きくなったわたし」)
- ④ 生活環境や生活空間を自らの手で創り出す活動を随所に示し、自立への基礎が養えるように配慮しました。(上巻「みんなともだち」、下巻「二年生の春」など)
- ⑤ 生活科は子どもの活動によって成立することから、取り上げる教材は、地域や学級あるいは子ども一人一人によって異なってくる場合が多くあります。そこで、子どもの願いや地域の実態に応じて自由に選択して学習活動ができるように、単元によっては、複数の教材を示すようにしました。(上巻「いきものといっしょ」、下巻「てづくりおもちゃ」「わたしたちがすむ町」など)
- ⑥ 自分や友達の生活・成長が意識できるよう、振り返りの場面を大事な学習の視点として示しました。特に、上下巻それぞれの巻末では、自分の幼いころの成長を支えてくれた家族や周りの人々とかかわりや生活科の二年間を通し、自分を振り返る場面を大切にし、その温かみや優しいまなざしを感じながら精神的な成長を考えることができるように示しました。(上巻「わたしたちの一ねんかん」、下巻「生活科の二年間」)

(3) 実践に基づいた子どもの姿や発せられることばの再現

- ① 子どもがおもいを込めてひたすら活動に打ち込む姿、比べ、試し、手ごたえのよさによるこび、気付きの質を深める姿、自他のかかわりについて思考したり、追究したり、成就感を得たりする姿などをさし絵や写真で示し、活動の触発や追究意欲の深まりにつながるようにしました。
- ② 子どものことばは、自ら取り込んだ体験の質と抜きがたい関係をもち、個性的で温かく、核心を突いた意識や感情、主張の表れです。そこで、それらを厳選して緊張感がありかつ端的でわかりやすい「吹き出し」や「対話」「詩・作文」で示し、活動や体験の質が高まるように配慮しました。
- ③ 表現は活動や体験を振り返り、その意味を意識化したり位置付けたりするうえで重要になってきます。そのために、絵や作文、歌、身体表現、劇などによる多様な表現活動を取り入れるように配慮しました。

(4) 合科的指導・他教科等との関連・総合的な学習の時間への発展を重視

- ① 小1プロブレムや入学期の子どもの発達特性を考慮し、遊びや活動を重視した総合的な展開ができるように工夫しました。
- ② 聞き取りやインタビューとその方法の立案、地域調べや地図の表しなどのように、他教科や3

年生以降の教科学習，総合的な学習の時間への発展などを考慮して単元の構成に努めました。

(5) 発達段階に応じた活動内容と安全性への配慮

それぞれの活動においては，各学校で実践された発達段階を考慮した題材を取り上げました。また，特に安全を要する活動場面においては，注意喚起のことばとキャラクターで明示しました。

(6) 子どもの学習意欲を触発する楽しい表示

- ① 巻頭や見開きのカラー写真，各単元の表示マーク，主人公やその友達が活躍するさし絵，メルヘンチックで夢のある表紙絵などに工夫を凝らし，子どもたちの学習意欲を触発し，活動のきっかけとなるように示しました。
- ② 五節句や伝統行事・伝承遊びにかかわる単元は，子どもたちが親しみ，やってみたいというきっかけや意欲につながるように，地域の特色を盛り込んだ「切り絵」で年間通して表しました。

(7) そのほか特に意を用いた特色

- ① 全体構想を，子どもの学校生活や行事，季節にあった学習活動などを考慮して，子どもの意識の流れに沿うよう時系列の単元配列としました。なお，使い易さを考慮して，上巻学習内容を1年生，下巻学習内容を2年生としました。
- ② 繰り返し訪れる野外学習の単元の中に，四季を通して「いつものばしょ」「さんぽみち」の小単元を設けました。なかでも，「さんぽみち」は，道すがら子どもたちが発見したり遊んだりする動植物を図鑑的に示し，観音開きページとしました。さんぽのあとには，記入できる「学習カード」を設けました。また，「二年生の春」では，生き物や植物がもつ不思議さやしくみを表し，科学追究のページとしての内容を盛り込みました。
- ③ 野外学習をはじめとし，活動の節々に気付きや発見を伝え合い，より高い学びや活動につながるように友達同士の学び合いや情報交換の場を示しました。また，そうした学習活動を支える教師のあり様が具体的にわかるように，写真やさし絵のなかに「教師の立ち位置」もできるだけ示しました。
- ④ 飼育学習の題材は，多数の学校における長年の実践の裏付けをもとに，ウサギを中核にヤギ・カタツムリ・カイコ・アイガモ・ハムスターなどを示し，選択肢や発展性をもたせました。なお，ヤギの場合は子どもの発達段階を考慮し，敢えて「子やぎ」という条件を添え，下巻の巻末に飼育活動の収束を示しました。
- ⑤ アサガオの多様な学習として，「ひとつぶの たねから」の中に設けた「いろみずあそび」「そめがみどうろう」などの小単元で溶解学習を取り上げ，植物のもつ不思議さや見事さに触れるとともに，生活の工夫につなげていく構成としました。
- ⑥ 上巻の巻末に資料ページ「きせつの うつりかわり」を設けました。「きせつの うつりかわり」

では、学習のまとめや発展を考え、自然や生活事象の移ろいを季節を通して比較して捉えることができるようにしました。また、下巻「わたしたちがすむ町」の学習の発展として、より広い視野の獲得と、さらに3年生以降の教科学習や総合的な学習の時間へのつながりを考慮して、資料ページ「みつけてみよう」を設けました。

- ⑦ 必要な情報がより多くの人に伝わるよう、カラーユニバーサルデザインに配慮して作りました。